



いわてキボウスター開拓塾がスタートしました。

10月1日、起業家人材育成プロジェクト「いわてキボウスター開拓塾」の開講式が岩手大学で行われました。第1期生となる今回の受講生は、参加校のうち岩手大学、岩手県立大学、同大盛岡短期大学部、富士大学、盛岡大学の学生から26名が選抜されました。学生は約半年間のプログラムの中でまちづくり、食、観光、商品開発などをテーマに、地域の起業家・事業者（本プロジェクトでは「地域リーダー」と呼んでいます。）とともに現場での実践を中心とした地域課題に取り組みながら、起業に必要な知識やリーダーシップを学び起業家精神を培っていきます。

開講式終了後には、まずビジネスの基本を学んでもらうことを目的に、岩手大学構内にてジュース販売の実習オリエンテーションを行いました。学生は、仕入れ値が決められた一定数のりんごジュースを、自分たちで設定した値段と販売方法で販売し、プログラムの取り掛かりとしてミニ事業を体験しました。

その開講式から1週間後、10月8日から3日間にかけて、本プロジェクトで取り組むテーマを提供する5人の地域リーダーの方々とともに遠野市及び陸前高田市で第1回合宿が行われ、授業が本格的にスタートしました。合宿初日の8日は(株)Next Commonsの林篤志氏、NPO法人東北開墾の高橋博氏に講演していただきました。



合宿第2日目以降は、地域リーダーの方々からのプレゼンテーションを聴講したのち、学生は事前に編成された5チームに分かれ、どの地域リーダーの元で半年間どんな活動をしていくか議論を交わし、地域リーダーと学生チームのマッチングが行われました。そして、これから取り組んでいく課題について地域リーダーと学生チームがディスカッションを行い、合宿を無事終えました。

学生たちはこれからそれぞれの地域リーダーの元で、計3回の

フィールドワークを行いながら、都度その学びを持ち帰り、計7回の講義やグループワークを経て、課題解決のビジネスプランを練っていきます。活動の集大成として、2月17日には最終報告会を岩手銀行赤レンガ館において行う予定です。このような取組の中で、学生の起業マインドが徐々に醸成されていくことが期待されます。



キボウスター (KIBOASTER) の由来について

これまで「起業家人材育成道場（仮称）」と呼んでいた起業家人材育成プロジェクトの正式名称が「いわてキボウスター開拓塾」となりました。

夢を大きく語ること、大口を叩く人のことを、英語では愛情を込めて「BOASTER = ボウスター」と呼びます。その「BOASTER」と「起業」や「希望」を意味する「キ = KI」をつなぎ合わせた「KIBOASTER (キボウスター)」には、「愛するふるさといわてを切り拓いて、夢を実現する」という思いが込められています。

地域リーダーとテーマ

地域リーダー	テーマ
岩手鷺宿温泉長栄館 照井貴博氏	8温泉宿によるジョイントベンチャーDMC会社の立ち上げ
株式会社バンザイ・ファクトリー 高橋和良氏	地域資源を活用した椿茶ビジネスの新たな事業展開サポート
松原農園 吉田貴浩氏	新規就農のメッカ紫波町における農村コミュニティ拠点作り
株式会社ファームステーション 酒井里奈氏	新商品「エタール・エキス」の開発と販売戦略
株式会社花巻家守舎 小友康広氏	小友康広のDNAで、学生家守舎の立ち上げ

参加学生の声

佐藤 瑞穂
岩手大学農学部 1年

私は将来、岩手を農業立国にしたいという夢を持っていわてキボウスター開拓塾（略称：キボスタ）に参加している岩手大学農学部の1年生です。実際に一員として参加してみて、今までに学んだことが大きく2つあります。

1つ目は、自分の考えを相手が納得するようにまとめて話すことの難しさです。キボスタには「相手を助けるための質問、意見はたくさん出そう！」という面白いルールがあるほど「自分の考えを相手に伝える機会」が沢山あります。初めは短時間で自分の考えを順序立てて話すことが出来ず、周りとの差を感じ、悩むこともありましたが、活動に参加していく中で、より説得力のある話し方を少しずつですが身に付けることが出来ました。周りの先輩と比べるとまだまだ努力が必要ですが、これからも他の学

生メンバーからも学んでいきたいです。

2つ目は魅力的な生き方、考え方を学ぶ学生が沢山いるということです。様々な団体に所属し活躍する学生、大きな夢を持つ学生、自分の活動についてとても楽しそうに話が出る学生など、本当に魅力的な学生がたくさん参加しています。そんな自分にはない視点、経験を持っている学生と話すことで、刺激を受けることができるのもキボスタの魅力であると思います。

私のキボスタでのあだ名は「パイオニアちゃん」です。パイオニアの名に恥じないように、魅力的な価値ある人間になれるようにこれからも研鑽を積んでいきたいです。



県内事業所見学バスツアーを実施しました。

8月～9月にかけて奥州市、一関市、北上市、花巻市の4市において事業所見学バスツアーを実施しました。この事業は、県内大学生らが企業や市役所を見学し、社員・職員と意見交換を行いながら実際の職場の様子を自分の目で確かめ、地元事業所の魅力を理解してもらうことで、学生の職業観・人生観の醸成と地元定着の促進を図ることを目的としたものです。昨年までは岩手大学単独で行っていた事業でしたが、今年はCOC+事業の一環として参加校の学生を対象に行われました。実施後の学生アンケートでは、95%の学生が「参加し

てよかった」、「他の学生にも参加を勧めたい」と回答しており、全体的に学生満足度の高い企画となりました。もともと公務員志向だった参加学生からは、社員との意見交換を通して、「仕事は公務員だけではないということに気づき、仕事の選択肢の視野が広がった」という意見もあり、学生の就職先に対する意識変化のきっかけとなっていることがうかがえます。

今年度はCOC+事業としては初めての実施であり、岩手大学生の参加が中心となりましたが、来年度以降は他の参加校からもより多くの学生に参加してもらえよう、一層幅広い周知活動を実施していきます。

■実施日程と見学先

	奥州市	一関市	北上市	花巻市
実施日時	平成28年8月24日	平成28年8月31日	平成28年9月6日	平成28年9月14日
見学先	(株)アイディーエス (株)デジアイズ (株)フジキン東北工場 奥州市役所	(株)岩手日日新聞社 世嬉の一酒造(株) SWS東日本(株) 一関市役所	(株)ジャパンセミコンダクター 北上市役所 東北KAT(株) (株)システムベース	花巻農業協同組合 (株)花巻温泉 サンボット(株)
参加学生数	22名	27名	12名	7名



これまでのインターンシップ関連の活動について

今年も岩手県内では様々なインターンシップが実施されましたが、その活動を振り返り今後につなげていくためのイベントとして「地域定着に向けた〈いわてのインターンシップ〉勉強会」、「インターンシップ学生交流大会」が開催されました。

「地域定着に向けた〈いわてのインターンシップ〉勉強会」

この夏県内では、これまでのインターンシップのように一企業が学生を受け入れるものとは異なり、地域が受け皿となって、就業体験とともに地域で生きることを学生が体感し地域への理解を深めてもらう、「地域志向型インターンシップ」と呼べる試みがいくつか実施されました。この地域に密着した「地域志向型インターンシップ」の取組状況について紹介し、今後のインターンシップについて考える「地域定着に向けた〈いわてのインターンシップ〉勉強会 - 自治体・業界団体が主導するインターンシップはどうあるべきか -」が10月13日、いわて県民情報交流センター(アイーナ)で開催されました。



当日は自治体、産業団体等の関係者約20名が出席し、インターンシップに参加した学生による体験報告とともに、インターンシップ活動のコーディネートに携わる岩泉町まるごとコネクター 穴田光宏氏、NPO法人wiz 八田浩希氏、NPO法人SET 岡田勝太氏、花巻市地域おこし協力隊 鈴木寛太氏、公益社団法人岩手県農業公社 吉村親氏の5人をパネリストに迎え、「地域志向型インターンシップ」の運営と課題」と題したパネルディスカッションを行いました。COC+においてはこのような取組を参考に自治体、産業団体、NPO等と連携しながら、県内各地の特性を踏まえた魅力的なインターンシップモデルの構築・展開を推進していきます。



■県内における「地域志向型インターンシップ」の取組

実施団体	取組の概要
岩泉町	地域として学生を受け入れ、「地域で働くことはそこに暮らすこと」を体験してもらうインターンシップを展開
NPO法人wiz	地域企業において一ヶ月にわたり課題解決に取組む実践型インターンシップ
NPO法人SET	陸前高田市・広田半島での地域課題を住民と共に考える、自己研鑽・チャレンジ型インターンシップ
花巻市	毎日異なるぶどう農家での農作業を通して地域の農業の現状と課題を学ぶインターンシップ
公益社団法人 岩手県農業公社	県内各地の農業法人における農業体験インターンシップ

インターンシップ学生交流大会



岩手県立大学をはじめとする東北地域の複数の大学・短大の連携により運営されている「インターンシップ in 東北」。学生は在学や県の枠を超えたインターンシップ参加が可能となっており、今年も夏休み期間を中心に様々なインターンシップの取組が実施されました。この「インターンシップ in 東北」のインターンシップに参加した学生を対象に、10月1日、「インターンシップ学生交流大会」が岩手県立大学及び国立岩手山青少年交流の家で開催されました。参加した学生たちは、グループワークやプレゼンテーションを通してそれぞれのインターンシップ体験を振り返り互いに共有しながら、自分自身にとってのインターンシップ体験の意義やその成果を確認し、今後どのように生かしていくかについて考えを深めました。



コラム これまでのインターンシップの分析と今後の課題について

船場 ひさお 岩手大学COC推進室特任准教授

インターンシップは、キャリア教育の一環として就業体験を行うものと考えられることが多いのですが、最近では1日だけの会社説明会のようなものも増えてきていて、ひと口にインターンシップと言っても、どんなものなのかわかりにくくなっているのも事実です。岩手県内では岩手県立大学が中心になって「インターンシップin東北」という、webサイトから受入れ企業も学生も、情報を見たり参加登録したりできる仕組みを作り、夏休みに1週間程度のインターンシップを勧め、年を追うごとに多くの企業・学生が参加するようになってきました。

ただ、岩手県の場合、大学生のほとんどが盛岡市周辺で生活しているため、若

い人たちが増えてほしいと願っている沿岸や山間地域でのインターンシップは、実施がなかなか難しいという悩みがあります。COC+では、なんとかこの課題を解決したいと、今いろいろな企画を練っています。一つは、地域ごとにその特長を活かしたバラエティに富んだインターンシップ・プログラムを、自治体と協力しながらデザインしていくことです。また、大きな企業と地域の中小企業を結んで、より幅広い視点からインターンシップを企画することも考えています。岩手県のおちこちで、インターンシップを通じて、学生が生き生きと多くのことを体験できるよう、一人でもたくさんの方々に応援していただきたいと思っています。